

「驚き」としての「喜び」の「現在」の美学へ

—— デカルト『情念論』における美的時間の可能性

馬場 朗 (東京女子大学)

デカルト最後の著作『情念論』(一六四九年)は、世界の「真理」の客観的把握を目指す彼の哲学にとって背景しかなさない筈の感性的次元の一つ「情念 (passion)」の体験を、「極めて真である」と前景化する。そして、「情念に最も揺り動かされうる人間こそ、人生で最も心地よさを味合う (goûter)」とさえ言う。但し、それはあくまでも、「知恵 (sagesse)」が「自らを情念の主人とみなし、それらを巧みに操縦する」限りにおいてである。そして、『音楽提要』以来デカルトが関心を持ち続けた悲しい歌や悲劇等の美的快の不思議な逆説もまた、この「知恵」による「情念」統御の文脈で語られよう。

しかし、本発表では『情念論』の美学的可能性を、従来の研究では等閑に付されてきた視点から明らかにしたい。そのために次の二点に着目する。

第一に着目するのは、『情念論』が実質的に美的経験の独自の「現在」の時間性を巡る議論を行なっている、という点である。美的体験は、逆説的な美的快としても顕現する「知的喜び」として導入される。そして、この美的快は、この著作が当初導入した「認知」と「意志」を巡る「受動・能動」の厳密な二元論が崩れ、相互が作用し合う濃密な「現在」という時間——本発表では「遅延する現在」と命名する——に根ざすのである。

しかも、この「知的な喜び」は主体内部の特に「意志」に支えられた「知恵」の統御のもとで必ずしも完結しない。これが第二点に繋がる。

第二に着目するのは、「高邁」概念が、その「遅延する現在」を作動させる、もしくはその「現在」の作動の「気付き」を意識させる契機として『情念論』で新たな位相を獲得する、という点である。その理解には、『情念論』の美的快の議論とも不可分な、一六四五年の複数のエリザベト宛書簡との比較が重要になる。書簡では、高貴な生まれのエリザベトに因んだ「高邁 (générosité)」が情念統御の要である「意志」に貫徹されること、これによって美的快の逆説を説明する道筋は既に示される。しかし、『情念論』は、この「高邁」を、基本情念の最初に位置する「驚き (admiration)」というデカルトが独自にその意義を認めた情念に結びつける全く新たな視点を導入する。つまり、「認知」と「意志」の協働による美的快の享受には「自己触発」が「主体」に深い「不意打ち」として到来する美的「現在」の可能性が排除されない、と発表者は解釈する。

成る程、以上の二つの論点をより積極的に展開するには、幾つかの重大な留保が問題となろう。しかし、『情念論』は、これらの留保にも関わらず、以上の論点を介してすぐ後に誕生する近代美学を予見するだけでない。美的体験の濃密な時間性、思いもかけずに我々を虜にするその美的な「現在」の意義を探り続けるべき現代にも重要な示唆を与えるものだろう。